維新の雪

◉相楽総三と赤報隊◉

小中 太道

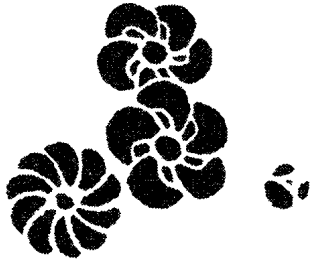
信州大学助教授・文博
高木俊輔／解説

維新の雪

◉相楽総三と赤報隊◉

小中太道

歴史小説シリーズ・2
維新の雪
(小中太道著)
NDC 913
偕成社　1978年　P. 216　18cm

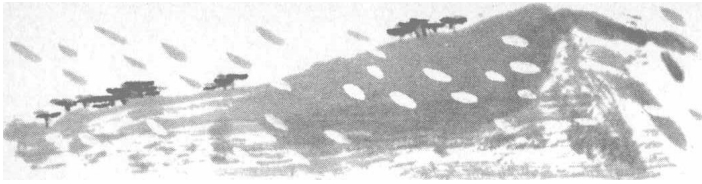


一九七八年六月　初版第一刷
著者　小中太道
発行者　今村廣
発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市谷砂土原町三の五
電話　東京(二六〇)三二二一代
振替　東京五―一三五二一番
印刷所　中央製版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1978　T. Konaka

8393―729020―0904　Printed in Japan



はじめに

小中太道

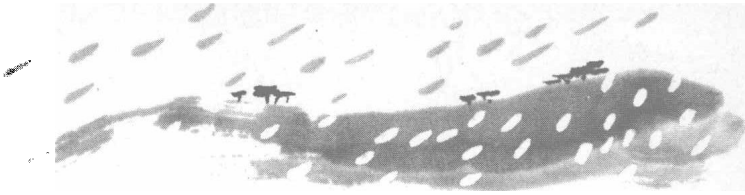
明治維新をなしとげるために、多くの志士たちがはたらいたことは、よく知られている。西郷隆盛をはじめ、桂小五郎（木戸孝允）、高杉晋作、伊藤俊輔（博文）、坂本竜馬などの志士の名を知らぬ者はあるまい。

いずれも、薩摩や長州、土佐などの、大きな藩出身の志士たちで、かれらのうち、生きのこって維新を迎えた者は、総理大臣にまでなった伊藤博文をはじめ、ほとんどが、明治政府のなかで高い地位についている。

だが一方、おなじ勤皇の志士でありながら、ほとんど人に知られぬままに、歴史の流れのなかに消え去った者の数も多い。

この本に出てくる相楽総三や、赤報隊の隊員たちも、その消え去った志士たちの一部であるが、かれらが、なぜ歴史に名をとどめることができなかったか、それをこの本では、大きなテーマとしてとりあげてみた。

そこを読みとってもらいたいと思う。



もくじ

深夜の銃声……6
薩摩屋敷焼き討ち……13
江戸湾の海戦……23
兵火のけむり……33
夜の比叡路……44
錦の御旗を！……53
赤報隊の誕生……61
京へかえりたい……66
滋野井隊のさいご……74
わるいうわさ……85
悲劇への道……95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

にがい夢……101
一番隊東へ……110
伊那谷の同志……118
上田の城下町……127
勤皇の誓約……137
わが道をゆく……146
にせ官軍のふれ……154
追分の夜襲……162
金原忠蔵のさいご……172
一番組消滅……182
春にきえる雪……192
解説……207

信州大学助教授・文博
高木俊輔

●赤報隊（相楽隊）幹部

役職名	志士名	年齢	出身地	前歴
総裁	相楽総三	30	江戸赤坂三分坂下	郷士の子
大監察	科野東一郎	38	信濃国上田城下海野町	豪商
監察	竹貫三郎	24	出羽国秋田藩	脱藩士
〃	岡田信造	46	常陸国志筑藩	〃
〃	金原忠蔵	31	下総国葛飾郡小金	豪商
監察兼使番	西村謹吾	25	伊勢国亀山藩	脱藩士
〃	伊達轍之助	—	紀伊国和歌山藩	〃
〃	丸山梅夫	31	信濃国上田城下房山村	豪農
〃	大樹四郎	20	出羽国秋田藩	脱藩士
〃	小松三郎	—	土佐国高知藩	〃
使番	金田源一郎	—	駿河国田中藩 下総飛地	〃
〃	高山健彦	—	駿河国田中藩 下総飛地	〃
〃	渋谷総司	22	下総国葛飾郡小金佐津間	豪農
〃	神田湊	21	甲斐国甲府	甲州勤番の子
北信分遣隊	桜井常五郎	37	信濃国北佐久郡春日村	豪農
〃	神道三郎	36	美濃国野村藩	脱藩士

維新の雪

――相楽総三と赤報隊――

小中太道

深夜の銃声

粉雪まじりの風が、つめたく街の辻で舞っていた。

慶応三（一八六七）年十二月二十二日、夜の四ツ半（午後十一時）ごろのことである。

街は、ふかいねむりの底にしずみ、空をひき裂くような風音のほかは、きこえる物音すらない。ぶきみな、死者の街のようなけはいが、すっぽりと大江戸をつつみ、しんしんと夜はふけていた。

そのふかい闇のなかで、ひとところ、ぽつりとあかりのもれるところがあった。芝の増上寺裏と三田通りをつなぐ赤羽橋のほとりに店をかまえる、越後屋というそば屋である。

もちろん、この夜ふけに、店をひらいているわけではない。

そのころ、江戸市中は、徳川幕府の力のおとろえとともに、まだ明るいうちから、強盗団があばれまわるという、不安なありさまになっていたのだが、幕府は、これをしずめるために、庄内藩をはじめとするいくつかの藩に、市中見廻りを命じていて、その屯所のひとつに越後屋

がえらばれていたのである。
ちょうど、この越後屋に詰めている庄内藩支配の新徴組が見廻りからかえってきたところらしく、店の中からは、あかりとともに、にぎやかな話し声ももれていた。若わかしい元気な声だ。一日のつとめを終えて、これから夜食の膳につこうというのであろう。がやがやといりみだれる声の調子には、くつろいだのびやかなようすさえみえる。江戸の重っくるしい夜の空気も、この越後屋の中には、入りこんでいないようであった。
が、そんな平和がいつまでもつづくはずはなかった。新徴組隊士のだれもが、まだ夜食の膳にはしをつけぬうちに、とつぜん、花火のはぜるようなけたたましい音がして、夜の闇のどこかから、越後屋めがけてバラバラッと、小銃弾が射ちこまれてきたのだ。
「賊だっ！」
「逃がすなっ！」
「追え、追えっ！」
いっせいに立ちあがった隊士たちのなかから、血気の若者数人が、刀をひっつかむなり、はだしのままで表へとびだした。

「賊はどこだっ！」

「まだ遠くへはいかぬはずだぞっ！」

しかし、あたりはまた、もとの闇にもどって、賊らしいもののけはいもみえない。

「薩摩屋敷のやつらにちがいはないのだがなあ。」

いまいましそうに隊員のひとりがつぶやいて、そこから南へ二百メートルほどはなれた薩摩藩上屋敷のほうをにらみつけた。

薩摩屋敷のやつらというのは、江戸の郷士相楽総三を総裁とあおぐ浪士隊のことで、西郷隆盛の命をうけ、慶応三年十月、徳川幕府のおひざもと江戸の町をひっかきまわすためにつくられた隊であった。

隊員の数は多いときには五百を数えたというが、いずれも相楽のよびかけにこたえて、ここにあつまった浪士たちであった。

もっとも、浪士とはいっても、もとからの武士というのはすくなく、農民や商家に生まれた者をはじめ、なかには、ばくち打ちのような者までまじっていた。

このことは、浪士隊幹部の顔ぶれをみただけでもわかる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

まず、総裁の相楽総三からして、武士の出身ではない。江戸の赤坂三分坂下（いまの港区赤坂八丁目）に屋敷をかまえる小島家に三男として生まれた秀才で、文武の道にすぐれ、二十才のころから門人をあつめて兵学、国学などの講義をしたほどの男であった。

だが、かれの生まれた小島家は、ありあまる富の力で郷士の地位を手にいれてはいたものの、武士の家柄ではなかったのだ。

そのほか副総裁の水原二郎が小仏峠（いまの東京都八王子市から神奈川県へぬける旧甲州街道の峠）の関守の子であったし、大監察の苅田積穂が武蔵国入間郡（いまの埼玉県入間郡）の医師であったというぐあいで、幹部十六名のうち農民、商家出身者が半数以上を占め、武士の家柄の者は五名にすぎなかったのである。

薩摩藩のねらいは、このよせあつめの浪士たちに、幕府のおひざもとをあらしまわらせ、幕府がとりおさえに出てくれれば、それをきっかけに討幕の動きに出ようというのである。

だから薩摩藩は、三田の上屋敷をかれらにあてがいはしたものの、軍用金のようなものは、まったくあたえていない。必要な資金は、じぶんたちでつごうしろというのだ。

この薩摩藩のねらいどおりに、浪士隊は江戸市中をはじめ関東の各地をあらしまわった。

まず十一月の末から、野州（いまの栃木県）出流山や甲府城に兵を向けて、幕府軍の力を分散させようとはかった。また江戸市中では、幕府の用をつとめる大商人や浅草蔵前の札差などをおそって、軍用金をかきあつめた。つまり、いまでいうところのゲリラ活動をやったわけである。

江戸市中は、たちまち恐怖のうずにまきこまれてしまった。

なにしろ、幕府のおひざもとで、庄内藩支配の新徴組などの見廻りをものともせず、鉄砲や刀をひっさげた強盗団が、わがもの顔にあらしまわるのだから、たまったものではない。

暮六ツ（午後六時）をすぎると、江戸市中は、人通りもばったり、とだえてしまうありさまとなった。

もっとも、こう書いたからといって、浪士隊の隊員たちが、むやみに罪もない市民たちを傷つけたり、強盗をはたらいたというのではない。隊のきまりはきびしく、これにそむくものは、とらえられ首をうたれたのである。そのきまりとは、

一、幕府をたすける者

二、浪士のはたらきをさまたげる者

三、唐物（外国からの輸入品）を商売とする者

この三つの者だけを敵としてこらしめる――というのであった。

だが、隊員たちのなかには、へいきで、このきまりをやぶる者もいた。なにしろ食うに困って、アルバイトをするようなつもりではいってきた者や、ばくち打ちのようなならず者も、隊員のなかにはまじっていたのだ。

おまけに、浪士隊とはまったく関係のない旗本の不良むすこ連中まで、あそぶ金ほしさの強盗をはたらいて、それを浪士隊になすりつけるありさまであったから、その日のくらしにおわれる江戸市民は、生きたここちさえせぬ毎日だったのである。

幕府の内部でも、これには困りはて、対策をどうするかで、はげしい議論がかわされていた。

「憎いのは、薩摩のやつらのやりくちじゃ。幕府をないがしろにするにもほどがある。ひとおもいに、かれらの根城をおそって、討ちはたしてしまえ。」

つよく、そういいはるのは、小栗上野介をはじめとする強硬派である。上野介は、フランスの駐日公使レオン＝ロッシュとしたしく、フランスの力をかりて薩摩、長州藩を討ち、そのあとで、新しい日本の政治をつくりあげようと考えた男であった。薩摩藩をにくむ心はなみなみで

はない。

これに対して、そんなことをすれば、これまでの公武合体のための努力が水の泡になり、薩摩藩に幕府討伐の口実をあたえるだけだ。いまは、ことをあらだてず、じっとがまんすべきときである、と主張するのは、勝海舟や山岡鉄太郎らの穏健派であった。

この対立する二つの主張は、薩摩藩邸の浪士隊が活動をはじめてからこのかた、およそ二か月ばかりのあいだ、幕府の内部で、まるで、なべの中ではじける豆のように、けたたましく、さわがしくさけびかわされたのだ。

これまでのながれとしては、この十月のなかばに、十五代将軍徳川慶喜が、土佐藩の意見をいれて大政を奉還するなど、なるべく朝廷とは、ことをかまえないようにしようとするうごきをみせていた。

つまり、勝海舟側の主張が、どうにか小栗上野介側の強硬論をおさえていたのだ。だがそれも、十二月なかばをすぎるころには、形勢逆転のかたちになりつつあった。

それだけ、浪士隊のあばれっぷりがすさまじかったわけである。

市中をあらしまわるばかりではなく、はじめに書いたように、十二月二十二日には、市中の

警備にあたる新徴組の屯所までおそうようになっていたのだ。

そういうやさき二十三日には、江戸城二の丸で、放火事件がおこった。これも浪士隊のしわざにちがいない、というわさが、どこからともなく城内にひろがった。

こうなってはもはや、穏健派の意見がとおるはずはない。

ついに、薩摩を討て、という小栗側の主張がとおって、薩摩藩邸討ち入りの命令が、庄内藩をはじめ、羽州上山藩、武州岩槻藩、越前鯖江藩の四藩にくだされたのであった。

こうして時代の波は、明治維新へむかって、はげしくうずをまきながら、ながれていったのである。

薩摩屋敷焼き討ち

慶応三年十二月二十五日の夜明けごろ、三田の薩摩藩上屋敷は、庄内、上山、岩槻、鯖江の四藩の兵に、ひしひしととりかこまれていた。

四藩の兵は、その数あわせておよそ千三百人、幕府お雇いのフランス人ブリューネの指導の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.